

国内外の医療機関における心理検査の実施と活用に関する文献研究

研究分担者 河野禎之（筑波大学人間系 助教）  
研究協力者 藤森禎子（目白大学保健医療学部言語聴覚学科 助教）  
高崎恵美（東京慈恵会医科大学精神医学講座 助教）  
櫻井 花（東京都健康長寿医療センター研究所 研究員）  
高橋香織（NTT東日本関東病院精神神経科 公認心理師・臨床心理士）

研究要旨

本研究は、医療機関における心理検査の実施実態と活用可能性を明らかにすることを目的として、国内外の文献を基にナラティブレビューを行い、関連研究を分析した。結果では、心理検査は広範囲にわたる医療領域で実施され、多様な検査が要心理支援者のニーズに応じて活用されている実状にあること、とくに「Wechsler知能検査」や「バウムテスト」などが頻繁に用いられていること、心理検査のフィードバックには専門性の確保や適切な報酬設定が必要であること等が示された。結論として、心理検査の適切な実施・活用に向けて、フィードバックの方法やプロセスの確立、多職種連携の視点も踏まえた検査者の専門性の確保、心理検査を用いることによる効果測定が早急に必要であることが明らかとなった。

A. 研究目的

心理検査は、一般的に「検査を実施し、その結果の分析を通じて要心理支援者等に関する情報を得る」ために使用される「公認心理師等が行う検査」とされる（松田・滝沢，2022）。心理検査は、現在わが国の医療・福祉・教育等のさまざまな領域・分野において広く活用されている。そのなかでも、医療現場、とくに病院やクリニック等の医療機関では、それぞれの機関の規模や種別に応じながら、精神科を中心とした多領域の部門等において心理検査が実施されている実状にある（一般社団法人日本公認心理師協会，2022）。現在、社会構造の急激な変化に伴い要心理支援者の課題は一層多様化・複雑化している。これらの課題を適切にとらえ、必要な支援につなげるためにも、心理検査の重要性が今後ますます増大することは明らかである。

一方、心理検査はその実施と処理（検査結果の解釈及びフィードバック等を含む）に専門性が求められる。実際、診療報酬では実施と処理の程度に応じて3段階（操作が容易なもの、操作が複雑なもの、操作と処理が極めて複雑なもの）が設定されている。したがって、心理検査は一定の訓練や研修を受けた公認心理師等の専門職により実施・活用されることが前提となる。くわえて、診療報酬に関係することからも、心理検査は臨床場面で実施・処理すればよいだけのものではない。いかに要心理支援者等の利益につなげられるかを医療機関におけるさまざまな文脈、それらは本来の治療や支援等のための文脈だけではなく、検査の実施・処理を担当する人員やそれらに要する時間、コスト等の文脈を含むなかで取り扱う必要があるとも言える。

これらのことから、津川・岩満（2018）が医療分野で働く心理職のコンピテンシーとして整理しているのと同様に、医療機関において適切に心理検査が取り扱われるためには、検査実施側の検査自体に関する知識や技術等の専門性のほか、臨床現場での事前準備や検査結果の活用に関するノウハウ、診療報酬に代表される医療機関特有の事情にも精通してい

る等の必要性がある。

しかし、上記の観点を踏まえ、これまで心理検査が実際の医療機関においてどのように実施され、どのように活用されているのか、そこにどのような課題があるのか等についての詳細はほとんど明らかにされていない。

そこで本研究では、医療機関における心理検査の実施実態と活用可能性を明らかにするための基礎的知見を得るため、国内外の文献・資料をもとに、心理検査の実施や活用に関する動向を分析することを目的とした。

B. 研究方法

1. 検索方略

本研究では、事前に実施した予備的な文献検索の結果から「医療機関における心理検査の実施及び活用実態」に関する研究報告が数少ないことが想定された。そのため、システマティックレビューやスコopingレビュー等の方法論に基づいた検索方略ではなく、それらを参考としながらナラティブレビュー（Grant and Booth, 2009）として適格基準・除外基準を設定し、データベースやインターネットから文献を抽出、さらにそれらをもとに灰色文献（grey literature）を検索する方略を採用した。

2. 対象文献と検索の手続き

上記の検索方略にもとづき、データベースとして英語文献については「Pubmed」と「PsycINFO」、日本語文献については「CiNii」と「医学中央雑誌」を用いて検索を行った。インターネットに関してはGoogleを用いて検索を行った。

検索キーワードは、英語文献では「Psychological/Neuropsychological/Test/Assessment」、日本語文献では「心理検査/神経心理学的検査/心理アセスメント/神経心理学的アセスメント」を基本とし、これらのキーワードを組み合わせて検索を行った。

また、文献の適格基準は「医療機関を対象に含む調査や報告であること」かつ「原則として臨床業務にお

ける実施及び活用の実態に言及しているもの」とし、除外基準は「心理検査が研究参加者の背景情報としてのみ記載されているもの」や「心理検査が医学的介入等の効果測定としてのみ用いられているもの」とした。

### 3. 分析方法

#### (1) 心理検査の実施状況の把握と課題の整理

本研究では、最初に、医療機関における心理検査の実施状況の把握と課題の整理を行うため、わが国の医療機関における公認心理師が行う心理支援の実態に関する直近の全国調査（一般社団法人日本公認心理師協会, 2022）をもとに、医療機関のどのような領域においてどのような心理検査が実施されているのか、心理検査の実施・活用に関連してどのような課題が挙げられるのかを整理した。

#### (2) 心理検査の実施・活用を巡る国内外の動向分析

上記の心理検査の実施・活用に関連する課題を踏まえて、公認心理師4名、言語聴覚士1名による協議を経て主たる分析の観点を設定し、適格基準・除外基準にもとづき選定された文献について分析を行った。

### 4. 倫理面への配慮

本研究は研究対象が文献であるため該当しない。

## C. 研究結果

### 1. 心理検査の実施状況の把握と課題の整理

最初に、心理検査の実施状況を把握するため、医療機関における公認心理師が行う心理支援の実態に関する直近の全国調査（一般社団法人日本公認心理師協会, 2022）をもとに、「精神疾患全般（高次脳機能障害/脳血管疾患・認知症を除く）」（以下、精神疾患全般）、「特定の精神疾患等（高次脳機能障害/脳血管疾患（認知症を除く）」（以下、特定の精神疾患等）、「認知症」、「腎疾患/糖尿病」、「心疾患」、「がん/緩和ケア」、「小児の精神疾患」、「小児の身体疾患」、「周産期」の9つの領域において実施されている心理検査について、その実施頻度の上位10位までを抽出した。次に、抽出された各領域の上位10位までの心理検査のうち、2つ以上の領域にて実施されている心理検査を抽出し、実施されている領域数ごとに整理した（表1）。

表1に示したように、「発達及び知能検査」として分類された「WAIS-III成人知能検査又はWAIS-IV成人知能検査」は9つの領域すべてにおいて実施されていた。内訳を確認しても「精神疾患全般」、「特定の精神疾患等」、「小児の精神疾患」、「小児の身体疾患」では回答の8割以上で実施されていた。

次に実施領域の割合が高かった心理検査は「人格検査」として分類された「バウムテスト」であり、7つの領域で実施されていた。内訳では「精神疾患全般」、「小児の精神疾患」、「小児の身体疾患」で6割以上が実施されていた。

「認知機能検査及びその他の心理検査」として分類された「長谷川式知能評価スケール」と、「人格検査」として分類された「ロールシャッハテスト」「TEG II 東大式/新版TEG/新版TEG II /TEG 3」は同列で3番目に実施領域の割合が高く、4領域で実施されていた。「長谷川式知能評価スケール」は「特定の精神疾患等」、「認知症」で実施割合が高く7割以上であった。「ロールシャッハテスト」は「精神疾患全般」

で6割以上が実施しており、「TEG II 東大式/新版TEG/新版TEG II /TEG 3」は「精神疾患全般」でおよそ5割の実施割合が示された。

そのほか、「MMSE」、「SCT」、「描画テスト」、「P-Fスタディ」が3領域、「コース立方体組み合わせテスト」や「WISC-IV知能検査」、「前頭葉評価バッテリー」、「SDS うつ性自己評価尺度」、「TMT-J Trail Making Test 日本版」等が2領域で実施されていることが示された。

次に、心理検査の実施・活用に関する課題を抽出するため、一般社団法人日本公認心理師協会（2022）のほか、村瀬（2015）、一般社団法人日本公認心理師協会（2021）、大沢（2022）による心理職・心理士・心理検査に関する調査報告をもとに、公認心理師4名、言語聴覚士1名による協議を複数回実施した。その結果、①検査に関する課題（心理検査の適正な保険収載の推進等）、②検査者に関する課題（心理検査に関する専門性の確保等）、③検査業務や活用に関する課題（検査結果のフィードバックの制度的裏付け等）、④検査環境に関する課題（検査用具や実施場所・時間・人員の確保等）の4つを課題の枠組みとして整理した。

さらに4つの枠組みのなかでも、とくに②や③に関連する課題として「評価を受ける当事者や家族介護者は、適切な評価によって現状を把握することを希望しており、そのためには適切な評価の選択と、丁寧な結果のフィードバックが必要である」（大沢, 2022）や、「心理検査を実施し、解釈して、主治医との共同作業でまとめ、主治医の指示の下でフィードバックするために費やす作業に対して、充分に見合った制度的裏付けが行われていない」（一般社団法人日本公認心理師協会, 2022）等の指摘があった「検査結果のフィードバックに関する課題」は、心理検査の実施・活用に関する現状において喫緊の課題であることを確認した。

### 2. 心理検査の実施・活用を巡る国内外の動向分析

心理検査の実施・活用に関する喫緊の課題とした「検査結果のフィードバックに関する課題」に着目し、適格基準・除外基準にもとづき選定された文献を分析し、国内外の動向をまとめた。

#### (1) 国内の動向

国内において心理検査の結果のフィードバックについては、一般社団法人日本公認心理師協会（2022）の調査が実施されて以降、大規模な量的調査は確認できなかった。一方、それ以前には一般社団法人日本臨床心理士会第3期後期高齢者福祉委員会（2019）や加藤ら（2021）、隈元ら（2021）が数十例～770例ほどを対象に心理検査の実施や活用を含む内容について調査結果を報告していた。

一般社団法人日本臨床心理士会第3期後期高齢者福祉委員会（2019）は、高齢者領域における臨床心理士772名を対象とした調査から、高齢者臨床の主な業務はアセスメント（神経心理学的検査）が最も多かったこと、アセスメントの結果は「医師との共有だけでは無く、介護職など他職種、介護家族、ひいては高齢者本人とも共有し、高齢者の日常生活支援に活用されるものになることが重要」等を指摘した。加藤ら（2021）も、認知症を伴う高齢者臨床に携わる心理職88名を対象とした調査から、高齢者臨床ではアセスメント業務が主であることと、結果のフィードバックまでを含めた所見作成についての教育ニーズが高いことを示している。さらに、隈元ら（2021）は関西圏

の臨床心理士200名への調査から、「心理アセスメントをクライアントの支援に活かそうと考えるならば、データの整理方法やその一般的な解釈の理解だけでは不十分であり、それらを踏まえつつ目の前のクライアントごとの個別的な対応を行うことが肝要」と指摘していることから、特定の検査対象に限らず、心理検査の結果のフィードバックの重要性を強調している。

一方、大規模な量的調査ではないものの、扇澤ら(2010)や小野(2018)、北上・八重田(2018)、郷間(2022)は心理検査、とくに知能検査/認知機能検査/神経心理学的検査を中心に、発達障害や高次脳機能障害の人々への心理検査の実施と検査結果をもとにした支援の有益性を示した。なかでも、郷間(2022)は、「保護者や担任教諭も、結果の情報提供や説明を受けることで、子どもの発達の状態、得意な分野や不得意な分野の内容、さらに発達の経過や今後の見通し等を知り、家庭や学校での発達支援に役立てることができる」と、保護者や担任教諭といった要心理支援者を取り巻く関係者も含めたフィードバックの重要性に言及していた。また、遠田(2020)や遠田(2022)はロールシャッハテストを中心に、フィードバックによりその後の心理療法の中での要心理支援者の自己理解にもつながったことや、心理検査の結果を他職種(主治医と病棟の看護師)と共有することで、他職種が抱えていた本人との関わりにくさ等の課題の改善に言及した。

## (2) 国外の動向

国外において心理検査の結果のフィードバックについては、本邦に比してより多くの調査報告がなされていた。Sweetら(2002)は、全米の臨床神経心理士1406名への調査から、1回の平均的なアセスメントにおいて、その施行に平均295分、スコアリングに平均73分、結果の解釈やレポート作成に平均139分、フィードバックやフォローアップに平均52分ほど要していることを報告した。Smithら(2007)は国際神経心理学会、全米神経心理学会、パーソナリティアセスメント学会の会員で、専門活動の一環として定期的にアセスメントを行っている心理学者719名を対象に調査を行い、回答者の大多数(71.3%)は、対面フィードバックをしており、3分の2(63.6%)は書面での報告をしていること、アセスメントを実施する心理士にとって、紹介者だけでなく、クライアントやクライアントの家族に対する対面でのフィードバックが重要な活動であることを示唆している。一方、Curry and Hanson(2010)が468名の博士号レベルの心理学者を対象に実施した調査からは、回答者の91.7%が、口頭でのフィードバックを「時々」またはそれ以上の頻度で行っているが、「毎回」患者に口頭で行っているのは3分の1にとどまったこと、くわえてフィードバックのトレーニングは十分とはいえず、トレーニングを受けられなかった人は自己研鑽で身につけていることを示した。また、Poston and Hanson(2010)は、治療的介入としての心理アセスメントに関する17の研究を対象としたメタ分析の結果から、治療的アセスメントと検査フィードバックを組み合わせることで、高い治療効果があることを結論付けている。

直近では、豪州のMcraeら(2024)は102名の臨床神経心理士を対象に調査を行う、研究参加の60%は評価フィードバックを行っていること、ただし領域にばらつきがあり小児科領域で最も頻度が高く軽度認知障害や認知症領域で最も頻度が低いこと、時間は3

0~60分程度を要していること等を報告した。また、Varelaら(2024)は米国で開業する臨床神経心理士184名を対象に調査を行った結果、検査後3週間以内にほぼすべての回答者(98.4%)が、対面式で患者に口頭によるフィードバックを行っていること、それらは通常45分であること、患者と紹介元医師の両方に検査後3週間以内に、最も一般的には報告書を介して書面によるフィードバックを提供すること等を報告した。さらに、Rosadoら(2018)は神経心理学的検査に関する患者フィードバックが転帰に及ぼす影響について218名の神経心理外来患者を対象に調査を行い、フィードバックなし群と比較して、フィードバック群では、追跡調査時にQOLの改善、病態の理解の促進、病態への対処能力の向上が報告されている。くわえて、特定の領域での報告ではあるが、McClintockら(2021)は大うつ病性障害の高齢者への臨床神経心理学的評価に関して、神経認知スクリーニング検査を受けることが臨床的に有益であること、包括的な神経心理学的検査は時間を要するが時間投資に対して臨床的に十分な見返りがあること等を示している。

これらの報告にくわえ、Grutersら(2022)による神経心理学的検査を用いた患者や家族とのコミュニケーションに関するスコopingレビューの結果からも、神経心理学的検査は幅広い診断に対して行われ、通常は対面で行われること、ほとんどの論文が神経心理学的検査に関する満足度について報告しており、有用なフィードバックが提供されると満足度が高まること、一方でフィードバックの情報の維持率は低いが、文書による情報提供などのコミュニケーション補助が維持率の向上に役立つこと等を示し、神経心理学的フィードバックの有益性と評価を実施する際の標準的な臨床手順の一部であるべきだと提言している。

## D. 考察

表1に示したとおり、医療現場のさまざまな領域において多様な検査が臨床現場で用いられていることがあらためて明らかになった。また、「WAIS-III成人知能検査又はWAIS-IV成人知能検査」は9つの領域すべてにおいて実施されており、内訳でも「精神疾患全般」、「特定の精神疾患等」、「小児の精神疾患」、「小児の身体疾患」では回答の8割以上で実施されていたことから、医療現場において最も実施・活用されている心理検査であることが明らかに示された。くわえて、「バウムテスト」も7つの領域で実施されており、「精神疾患全般」、「小児の精神疾患」、「小児の身体疾患」を中心に人格検査の中では最も実施・活用されていることが示された。これらの検査は診療報酬に算定されている検査である一方、診療報酬外の検査であっても、少なくとも2領域において積極的に実施・活用されている現状も明らかにされた。

これらのことから、本邦の医療機関における心理検査の実施・活用の現状として、多様な検査が要心理支援者のニーズに応じて実施・活用されていること、そのなかでも「WAIS-III成人知能検査又はWAIS-IV成人知能検査」と「バウムテスト」は共通して広く実施・活用されていること、診療報酬外の心理検査も要心理支援者のニーズに応じて実施・活用されている現状にあることの3点が考えられた。

一方で、本研究では国内の全国調査を中心とした先行研究のレビューから4つの課題の枠組み(①検査に関する課題、②検査者に関する課題、③検査業務や活用に関する課題、④検査環境に関する課題)を整

理した。上述した心理検査の実施・活用の現状を、これら4つの枠組みから俯瞰すると、以下の点を論点として提案できると考えられた。

第一に、とくに①検査に関する課題や③検査業務や活用に関する課題に関連するものとして、「WAIS-III成人知能検査又はWAIS-IV成人知能検査」や「バウムテスト」といった頻繁に実施・活用されているニーズの高い検査について報酬が適正であるかという点である。後述するように、国外の研究報告では検査の実施のみならず、そのスコアリングやフィードバック等には多大なコストを要することは明らかであるが(Sweetら, 2007; Mcraeら, 2024)、そのコストに見合うだけの利益があることも複数の報告から明確に示されている(McClintockら, 2021; Grutersら, 2022)。現状では、たとえば「WAIS-III成人知能検査又はWAIS-IV成人知能検査」は「操作と処理が極めて複雑なもの」として450点、「バウムテスト」は「操作が複雑なもの」として280点が設定されている。これらが心理検査を巡る一連の行為の報酬として適正なものであるかをあらためて検討する必要性は高いと言える。

第二に、とくに①検査に関する課題や④検査環境に関する課題に関連するものとして、そもそも診療報酬外の検査が実施・活用されている実態をどのとらえるかという課題である。心理検査はさまざまな目的のもとで実施されるが(松田・滝沢, 2022)、いずれにせよ要心理支援者のニーズに合致することが前提となる。そのため、診療報酬外の心理検査が複数の領域で高い頻度で実施・活用されている現状は、それだけ要心理支援者の問題解決のためには多様な心理検査を採用する必要性があるという現場のニーズを反映したものと考えられる。今後も多様化・複雑化する要心理支援者のニーズに応えるためにも、これらの心理検査に関する適正な保険収載や検査環境の整備を進めることを検討する必要性は高いだろう。

第三に、②検査者に関する課題や③検査業務や活用に関する課題として、とくに国内外の動向を分析するうえでも重視した「検査結果のフィードバックに関する課題」がある。このことについて、海外ではすでに心理検査の実施・活用だけではなくフィードバックに焦点を当てた研究論文として複数の調査が実施されていた。くわえて、レビュー研究も実施されており、知見の蓄積が進んでいることが示唆された。一方で本邦では調査報告書が主であり、研究論文としての報告は少なかったことから、心理検査の実施・活用に関する実態はいまだ不明な部分が多い現状にあると考えられた。本邦の医療機関では、診療報酬という公的保険制度による枠組みのなかで多くの心理検査が実施されている現状にある。そのため、心理検査の実施実態にくわえて、要心理支援者本人の権利や利益に直結する「検査結果のフィードバック」について一層の知見を積み重ねる必要があると考えられる。

検査結果のフィードバックについて、今回のレビューからはさらに「フィードバックの効果的な方法とトレーニングの必要性」、「多職種間での情報共有の重要性」、「フィードバックがもたらす効果測定的重要性」が国内外の動向として重視されていると考えられた。

フィードバックの効果的な方法に関して、口頭での説明だけでなく書面による報告や情報提供の補助ツールの利用が有効であることが、Grutersら(2022)によるスコopingレビューから指摘されていた。

現在ではDX(デジタル・トランスフォーメーション)によりさまざまなデジタル・デバイスが心理検査においても活用されている。書面を含め、これらのデバイスを活用したアプローチは、今後フィードバックの理解を深めるために重要になることは明らかであり、要心理支援者やその家族、支援者への心理教育においても有効な手段となると考えられる。

フィードバックの技術を向上させるための体系的なトレーニングの必要性も国際的に指摘されていた。たとえば、Curry and Hanson(2010)では、多くの臨床家がフィードバックのトレーニングが不十分であり、自己研鑽に依存している状況が示されていた。したがって、フィードバックの方法や質を向上させるための専門的なトレーニングや研修プログラムの提供が本邦においても求められるといえる。

多職種間での情報共有の重要性に関して、フィードバックの対象は要心理支援者本人に限らないことが本研究のレビューからあらためて示された。たとえば本邦の調査では、高齢者臨床場において心理検査結果の医師や介護職との共有が積極的に行われており、これが日常生活支援に活用されることの重要性が指摘されていた(一般社団法人日本臨床心理士会第3期後期高齢者福祉委員会, 2019)。同様に、保護者や担任教諭といった要心理支援者を取り巻く関係者へのフィードバックの重要性も示されていた(郷間, 2022)。国外の研究でも、心理検査の結果の共有がクライアントやその家族に対しても積極的に行われており、患者ケアの質を向上させるための重要な要素とされていた(Smithら, 2007)。誰に対してどのような結果をフィードバックし、どのような支援を実現していくのか、そうした心理検査を活用した支援全体の設計も心理検査に関わる専門性として今後問われてくると考えられる。

これらの考察は、心理検査の結果のフィードバックが単なる情報伝達ではなく、要心理支援者とその家族、支援者が直面する多様な課題に対する具体的な対応策を提供するための重要なプロセスであることを示唆している。しかし、繰り返しとなるが、本邦においては心理検査の実施・活用に関する科学的な知見は十分ではない。ここまでに示した課題にくわえて、海外で行われているような検査結果のフィードバックによる効果測定を含め、心理検査が要心理支援者・家族・支援者の予後や心理等に与える影響について、適切なプロトコルにもとづいた縦断的な追跡調査等を実施する必要がある。その前提となる、より詳細な本邦における心理検査の実施・活用に関する実態把握の調査も早期の実施が求められる。

## E. 結論

本研究の結果から、本邦の医療機関における心理検査の実施・活用の現状として、多様な検査が要心理支援者のニーズに応じて実施・活用されていること、そのなかでも「WAIS-III成人知能検査又はWAIS-IV成人知能検査」と「バウムテスト」は共通して広く実施・活用されていること、診療報酬外の心理検査も要心理支援者のニーズに応じて実施・活用されている現状にあることが示された。くわえて、①検査に関する課題、②検査者に関する課題、③検査業務や活用に関する課題、④検査環境に関する課題の4つの枠組みを課題として整理した。さらに、4つの枠組みから国内外の動向を分析し、心理検査の報酬が適正であるか、診療報酬外の検査が実施・活用されている実態をどうとらえるか、検査結果のフィードバックに関す

る課題をどう克服するかについて論じた。とくに検査結果のフィードバックに関しては、フィードバックの効果的な方法とトレーニングの必要性、多職種間での情報共有の重要性、フィードバックがもたらす効果測定的重要性について考察した。本研究の結論として、心理検査の適切な実施・活用に向けて、とくに検査結果のフィードバックに関して、フィードバックの適切な方法の活用を含めたプロセスの確立、多職種連携の視点も踏まえた検査者の専門性の確保、心理検査を用いることによる効果測定が早急に必要であることが明らかとなった。

## G. 研究発表

### 1. 論文発表

なし

### 2. 学会発表

なし

## H. 知的財産権の出願・登録状況 (予定を含む。)

### 1. 特許取得

なし

### 2. 実用新案登録

なし

### 3. その他

なし

## ・引用文献

Curry, K. T., & Hanson, W. E. (2010). National survey of psychologists' test feedback training, supervision, and practice: A mixed methods study. *Journal of Personality Assessment*, 92(4), 327-336. <https://doi.org/10.1080/00223891.2010.482006>

郷間英世 (2022) 医療機関の発達外来における新版 K 式発達検査の利用を中心に 発達障害研究, 43 (4), 352-364. [https://doi.org/10.60260/jasdd.43.4\\_352](https://doi.org/10.60260/jasdd.43.4_352)

Grant, M. J., & Booth, A. (2009). A typology of reviews: An analysis of 14 review types and associated methodologies. *Health Information and Libraries Journal*, 26(2), 91-108. <https://doi.org/10.1111/j.1471-1842.2009.00848.x>

Gruters, A. A., Ramakers, I. H., Verhey, F. R., Kessels, R. P., & de Vugt, M. E. (2022). A Scoping Review of Communicating Neuropsychological Test Results to Patients and Family Members. *Neuropsychology Review*, 32(2), 294-315. <https://doi.org/10.1007/s11065-021-09507-2>

一般社団法人日本公認心理師協会 (2021) 公認心理師の活動状況等に関する調査 厚生労働省令和2年度障害者総合福祉推進事業 <https://www.mhlw.go.jp/content/12200000/000798636.pdf> (2024年4月27日最終アクセス)

一般社団法人日本公認心理師協会 (2022) 医療機関における公認心理師が行う心理支援の実態調査 厚生労働省令和3年度障害者総合福祉推進事業 <http>

[s://www.jacpp.or.jp/document/pdf/pdf20220530/00\\_20220530.pdf](s://www.jacpp.or.jp/document/pdf/pdf20220530/00_20220530.pdf) (2024年4月27日最終アクセス)

一般社団法人日本臨床心理士会第3期後期高齢者福祉委員会 (2019) 高齢者領域における臨床心理士の活動実態に関するWEB調査報告書(2018) [https://www.jscpp.jp/suggestion/sug/pdf/koureisya\\_WEBhoukoku.pdf](https://www.jscpp.jp/suggestion/sug/pdf/koureisya_WEBhoukoku.pdf) (2024年4月27日最終アクセス)

加藤佑佳・大庭輝・成本迅 (2021) 認知症を伴う高齢者臨床に携わる心理職を対象とした質問紙調査 高齢者のケアと行動科学, 26, 103-121. [https://doi.org/10.24777/jsbse.26.0\\_103](https://doi.org/10.24777/jsbse.26.0_103)

北上守俊・八重田淳 (2018) 高次脳機能障害者の就労支援における神経心理学的検査の有用性について: システムティックレビューとメタアナリシスによる検討 作業療法, 37(2), 168-178.

隈元みちる・竹内直子・石田喜子・稲月聡子・岡尾裕美子 (2021) 知能検査・発達検査の施行状況の実態と心理職の感じる苦労と醍醐味—関西圏の臨床心理士への質問紙調査から— 教育実践学論集, 22, 59-68.

松田修・滝沢龍 (2022) アセスメントの目的と方法 松田修・滝沢龍 (編) 現代の臨床心理学2 臨床心理アセスメント (pp.11-25) 東京大学出版会.

McClintock, S. M., Minto, L., Denney, D. A., Bailey, K. C., Cullum, C. M., & Dotson, V. M. (2021). Clinical Neuropsychological Evaluation in Older Adults With Major Depressive Disorder. *Current Psychiatry Reports*, 23(9), 55. <https://doi.org/10.1007/s11920-021-01267-3>

McRae, S. E., Kelly, M., Bowman, J., Schofield, P. W., & Wong, D. (2024). Neuropsychological feedback: A survey of Australian clinical practice. *Australian Psychologist*. <https://www.tandfonline.com/doi/abs/10.1080/00050067.2023.2267165>

村瀬嘉代子 (2015) 心理職の役割の明確化と育成に関する研究 厚生労働科学研究費補助金厚生労働科学特別研究事業 <https://mhlw-grants.niph.go.jp/project/23665> (2024年4月27日最終アクセス)

扇澤史子・磯谷一枝・山中崇・山本直宗・分須友香・稲葉百合子・大塚邦明 (2010) 認知機能検査を認知症の生活障害支援に活用した1例: 本人, 家族への心理教育の視点から 日本老年医学会雑誌, 47(5), 474-480. <https://doi.org/10.3143/geriatrics.47.474>

遠田香織 (2020) 検査者の実感を伴った理解がフィードバック面接に与える役割について考える: 検査場面における生きたやりとりをフィードバックに活用すること 包括システムによる日本ロールシヤッフ学会誌, 24(1), 39-50.

遠田香織 (2022) 治療の起点としてのフィードバック面接 ロールシヤッフ法研究, 26, 30-39.

小野次朗 (2018) 心理検査 日本臨床, 76(4), 584-590.

大沢愛子 (2022) 認知症者に対する最適な医療・ケアのあり方を支援する神経心理検査等の評価法の幅広い利用に向けた指針策定に関する研究 厚生労働科学研究費補助金認知症政策研究事業 <https://mhlw-grants.niph.go.jp/project/157732> (2024年4月27日最終アクセス)

Poston, J. M., & Hanson, W. E. (2010). Meta-analysis of psychological assessment as a ther

apeutic intervention. *Psychological Assessment*, 22(2), 203-212. <https://doi.org/10.1037/a0018679>

Rosado, D. L., Buehler, S., Botbol-Berman, E., Feigon, M., León, A., Luu, H., Carrión, C., Gonzalez, M., Rao, J., Greif, T., Seidenberg, M., & Pliskin, N. H. (2018). Neuropsychological feedback services improve quality of life and social adjustment. *The Clinical Neuropsychologist*, 32(3), 422-435. <https://doi.org/10.1080/13854046.2017.1400105>

Smith, S. R., Wiggins, C. M., & Gorske, T. T. (2007) A survey of psychological assessment feedback practices. *Assessment*, 14(3), 310-319. <https://doi.org/10.1177/1073191107302842>

Sweet, J. J., Peck, E. A., Abramowitz, C., & Etzweiler, S. (2002). National Academy of Neu-

ropsychology/Division 40 of the American Psychological Association practice survey of clinical neuropsychology in the United States, Part I: Practitioner and practice characteristics, professional activities, and time requirements. *The Clinical Neuropsychologist*, 16(2), 109-127. <https://doi.org/10.1076/cli.n.16.2.109.13237>

Varela, J. L., Sperling, S. A., Block, C., O'Leary, K., Hart, E. S., & Kiselica, A. M. (2024). A survey of neuropsychological assessment feedback practices among neuropsychologists. *The Clinical Neuropsychologist*, 38(3), 529-556. <https://doi.org/10.1080/13854046.2023.2233738>

表1 医療機関の複数領域において実施頻度の高い心理検査

|     | 発達及び知能検査   | 認知機能検査及びその他の心理検査                         | 人格検査  | 診療報酬外   |
|-----|--|--|---|---|
| 9領域 | WAIS-III成人知能検査又はWAIS-IV成人知能検査                    | —  | —   | —   |
| 8領域 | —  | —  | —   | —   |
| 7領域 | —  | —  | バウムテスト                                      | —   |
| 6領域 | —  | —  | —   | —   |
| 5領域 | —  | —  | —   | —   |
| 4領域 | —  | 長谷川式知能評価スケール                             | ロールシャッハテスト, TEG II 東大式/新版TEG/新版TEG II/TEG 3 | —   |
| 3領域 | —  | MMSE                                     | SCT, 描画テスト, P-Fスタディ                         | —   |
| 2領域 | コース立方体組み合わせテスト, WISC-IV知能検査, 田中ビネー知能検査, 新版K式発達検査 | 前頭葉評価バッテリー, SDS うつ性自己評価尺度, STAI状態・特性不安検査 | —   | TMT-J Trail Making Test 日本版, HADS 日本語版, PHQ9 患者健康質問票-9, BDI-II ベック抑うつ尺度 |

※ 領域は、一般社団法人日本公認心理師協会（2022）に記載のある「精神疾患全般（高次脳機能障害/脳血管疾患・認知症を除く）」「特定の精神疾患等（高次脳機能障害/脳血管疾患（認知症を除く）」、「認知症」、「腎疾患/糖尿病」、「心疾患」、「がん/緩和ケア」、「小児の精神疾患」、「小児の身体疾患」、「周産期」の9領域を指す